

# 『こころ』の授業

——「先生」に学び、生きること——

古川義郎

「毎年お正月に、同じ小説を読みなさい。それに堪える作品を選びなさい。」

平野芳信先生から生涯に渡って課された宿題である。「読みはテキストと自己の交差点に生じるものだ。同じテキストに触れ、読みの変化に自らの変質を知る」。(先生ご自身は、確か谷崎潤一郎「細雪」を選んでおられたと記憶している。)

この教えを卒業以来十五年常を守ってきたといえれば嘘になるが、それでも数年に一度は正月に、そして高校二年生を担当した年には授業で読んできたことを思えば、師の教えを実感しているという点で、忠実な弟子の一人と言って差し支えあるまい。

—

繰り返し読み、何度か授業した夏目漱石『こころ』。定番の問いがある。

「《K》はなぜ自殺したのか」

まず、授業におけるこの問いからの展開を確認しておこう。

多くの場合、《K》の自殺の理由を考えると、《先生》が《K》

にした仕打ちを確認していくことになる。そして、その時々で《先生》がどのような心情だったかを捉えていく。

《K》はなぜ自殺したのか」と問いながら、そこでフォーカスされるのは《先生》の「行為」であり《先生》の「心情」である。《先生》は、《K》の恋愛の道を「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という《K》自身の信条を使って塞ぎ、自らは自分の《お嬢さん》への思いを《K》に伝えることはなく奥さんと直談判し、《K》を出し抜く形で《お嬢さん》との結婚を取り付けた。友情よりも自分の恋を優先し、友人からの相談を逆に利用して自分の恋を成就させた《恋愛エゴイズム》に読者のまなざしは注がれる。

「《K》はなぜ自殺したのか」

この問いに、多くの生徒はこう答える。

「《先生(私)》に裏切られたから」「《お嬢さん》への恋に破れたから」

「裏切られて自殺するほどの友人」や「破れて自殺するほどの恋」を(多くの場合)手にしていない生徒にとって、自決した《K》との距離は遠い。それに比べ、《先生》の《恋愛エゴイズム》には、

自分もひよつとしたら同じことをしてしまふのではないか、という共感的恐れがあるようだ。したがって、生徒は《先生》の裏切りを非難しつつも、彼の葛藤や安堵に共感と反感を重ね、二進も三進もいかなくなっていく《先生》の思考や心理の枠組みで物語（遺書）を読み進める。「一人称小説の語りは、あくまでその『語り手フィリター』を通した主観的なものであり、『事実』とは限らない」。小説読解で繰り返し伝えてきたことは完全に忘れ去られ、《先生》の語りを「事実」として受容していく。

奥さんのいうところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初は「そうですかとただ一口いっただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「おめでどうございます」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事ができません」といったそうです。奥さんの前に坐っていた私は、その話を聞いて胸が塞がるような苦しさを感じました。（下四十九）

「最も落ち着いた」「ただ一口いっただけ」という語りに、《K》の「そうですか」の五文字はその深刻性を剥奪される。

「結婚はいつですか」「何かお祝いをあげたいが……」と続く言

葉に《先生》が感じた苦しさは、《K》に対する申し訳なき、後ろめたさからくるものだろう。なぜなら、《K》は《先生》の裏切りと自らの失恋を悟ったにも関わらず、その悲しさや怒りをおくびにも出さず祝福を述べているのだから。「そう読んでしまふ」。

「結婚はいつですか」という問いの真意は、蓋をされてしまふ。

この数日後、《K》は自殺する。《先生》が《K》に《お嬢さん》への恋を打ち明けられ、その恋の行手を「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という《K》本人の信条を使って塞ぎ、自分も《お嬢さん》を手に入れたことを《K》に伝えることなく、《お嬢さん》ではなく奥さんに直談判して《お嬢さん》との結婚を取り付け、それを《K》が知った、その数日後である。その数日を「超然とした態度で」過ごした器の大きな《K》に「『おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ』という感じが私の胸に渦巻」き、「さぞKが軽蔑している事だろうと思つて、一人で顔を赧らめ」た《先生》は、これら一連の自分の所業が《K》を死に追いやった、と明確に自覚している。

Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問

の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。(下五十一)

読者は《先生》の自覚とおりの語りに、《K》の自殺の原因は「先生」に裏切られたから」「《お嬢さん》への恋に破れたから」と答えることになるのだ。

《K》の遺書について、《先生》は次のように語る。そこでは、先生が自らの《恋愛エゴイズム》のせいで《K》を死なせてしまった罪悪感に襲われながらも、自分が《K》を裏切り死に追いやったという「事実」が奥さんや《お嬢さん》に露見することを恐れ、世間体を重視してしまう《自己保身エゴイズム》が姿を見せる。

私はまたああ失策しさまったと思いました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らしました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事ができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取ってどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があったのです。私はちょっと眼を通しただけで、ま

ず助かったと思いました。(固より世間体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。)(下四十八)

もし、その遺書に「私の予期したようなこと」が書いてあったら、《先生》はその遺書をどうしたのだろう。《自己保身エゴイズム》を最大限發揮し、遺書を闇に葬ったのだろうか。そんなことを考えながら、いよいよこの小説は《先生》の二つのエゴイズム、《恋愛エゴイズム》と《自己保身エゴイズム》がメインテーマになる。このようなエゴイズムが人の命を奪うことさえあるのだ、などという教訓めいた警句が近づいてしまえば、もはや「《K》はなぜ自殺したのか」という問いは顧みられる可能性を喪失する。

この問いは、《K》本人の自殺の理由ではなく、むしろ《先生》のエゴイズムについて考えるためのトリガーとして機能してしまう。《K》の「行為」や「心情」ではなく、「先生」の「行為」と「心情」にフォーカスするトリガーとして。そこに目を向ける意義を否定するつもりは毛頭ない。

しかし、このままでは《K》があまりに不憫である。

## 二

「君たちは、《K》が自殺を決意したタイミングはいつだと考えているか」

この問いは、《先生》と《お嬢さん》との婚約を知り、それが原因で《K》は自殺したと読んでいる相手にはほとんど意味を為さな

い。そこで、こう投げかける。

「君たちは、『K』は『先生』が自分を出し抜き、『お嬢さん』との婚約を取り付けたことを奥さんから聞かされ、その後、自室で遺書を書いて自殺した、そう考えている。」

「一方で、『K』の自殺の原因が『先生』の裏切りや失恋でないことを指摘した論文は数多くある。石原千秋氏をはじめとし、それを引用した柳澤浩哉氏、中広全延氏は、『K』の自殺の決意は上野での対決の時点でなされていると指摘している。」

お嬢さんへの恋が常日頃の「精進」と矛盾していることを先生に問いつめられたKは、上野の公園で「覚悟、——ならない事もない」(下四十二)と言います。この当時、先生はこの「覚悟」を恋の告白だと思ひ込んでしまいますが、この遺書を書いている「いま」では自殺の「覚悟」だと思っているようです。さて、問題はその晩の記述です。

私は程なく穏やかな眠に落ちました。然し突然私の名前を呼ぶ声で眼を覚めました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、其所にKの暗い影が立っています。(下四十三)

次の日、先生が何か話があったのかとKに聞くと、「そうではないと強い調子で」否定します。ところが、Kが自殺した晩に関しても「見ると、何時も立て切つてあるKと私の室との襖が、この晩と同じ位開いています」(下四十八)という記述があるのです。これらのことから考えると、先の上野から帰った

晩に、もし先生がKの声に気づかずに眠っていたら、Kは自殺していたのではないかと考えるのが自然ではないでしょうか。

それは言うまでもなく、先生がKを裏切つたことをKが知る以前の事です。そして、Kが実際に自殺したのも、先生の裏切りを知つた日ではありませんでした。したがつてこういう結論になります。すなわち、Kの自殺の原因は失恋のためではないし、先生の裏切りを知つたためでもありません。①

仮に、彼らが述べるように、上野での対決のタイミングで『K』が自殺を決意していたならばどうなるのだろうか。『K』の言う覚悟は、恋愛を諦めて道に徹する覚悟ではなく、道を捨てて恋愛に突き進む覚悟でもなく、自殺する覚悟であつたと仮定したなら何が想定されるだろう。

あの夜、『先生』の眠りを確認するため呼びかけたものの、『先生』が目を覚ましたことによつて『K』の自殺が未遂に終わったのだとしよう。

もしそうならば、ランプの逆光で「黒い影法師」になつている『K』の背中の方こう側には、そのランプが灯す机の上には、その時点で確かに『K』の遺書が準備されていたはずなのだ。

『K』の自殺の理由を今一度考えるため、彼の遺書をしつかりと見つめてみる。これに関しては『先生』の語りを手がかりにするほかはない。しかし、漱石は明らかにある事実にとどり着く痕跡を残している。

最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。(下四十八)

「墨の余りで書き添えられたらしく見える」とはいったい何なのか。文字が掠かすれていたのか、それとも文字の墨が他と比べて薄かったのか、それは分からない。しかし、この描写は、この箇所だけが、他の部分に記された文字の墨の具合とは異なっていた、ということを示唆しているのではないのか。

《K》の遺書は、一息に書かれたものではない。そうであるならば、一つの可能性として、最後の「もっと早く死ぬべきだったのになぜ今まで生きていたのだろうか」だけは、別の日に書き加えられたのではないのか。

あらためて、「《K》はなぜ自殺したのか」について、《K》の「行動」や「心情」を中心に見ていこう。

《K》は、《先生》に《お嬢さん》への恋心を打ち明けた。「道のためにすべてを犠牲にする」という第一信条のもと「精進し」て生きてきた《K》にとって、道の妨げとなってしまうこの恋を選ぶことはできない。それでも「進むべきか退くべきか」という葛藤に苛まれ、「子供の頃から仲好し」で、これまでの自分の半生をよく知る《先生》に「公平な批評を求め」たのだ。

その結果、上野で《先生》から「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という、かつて自分が《先生》に向けて放った言葉を突きつけられてしまう。

それまで《K》は、道の妨げにしかならないようなものは全て退け「精神的に向上心のある」生き方をしてきた。そのような崇高な生き方を理解できない《先生》に対して「気の毒そうな顔」に「同情よりも侮蔑」の色を浮かべてきた。

《先生》の愚かしさを指摘したフリーズが、現状の自分の愚かしさを浮き彫りにするものとして、撥ね返ってきたことになる。

「馬鹿だ」「僕は馬鹿だ」

力なくそう答えた《K》の言葉には、すべてを犠牲にして精進してきた道を失ったことの自覚が見出せる。《お嬢さん》への恋にとられた時点で道を失っていたことに、《先生》の言葉によって気付かされてしまった《K》は、「びたりとそこへ立ち留まったまま動」くこともできず、「地面の上を見詰め」つつけるしかなかったのだ。「道のために全てを犠牲にする」とは「道が自分のすべてだ」と同義だろう。人生すべてをかけてきたものを失ったとき、それまでかけてきた熱量と同じ質量の喪失感と絶望がもたらされる。家に帰ってからの《K》の様子からも、彼の受けた衝撃の大きさが感じられる。

平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、碌碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室むへ引き取りました。(下四十二)

早々と戻った自室で《K》は何をするのか。《K》の言う「覚悟」が自殺する覚悟であった場合、おそらく遺書をしたためる。そして、この時点で書かれる遺書の内容は当然このようになる。

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりとした文句でその後あとに付け加えてありました。世話ついでに死後の片付方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜しく詫をしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。(下四十八)

《先生》は、自分にとって「どんなにつらい文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期し」、それにおびえたが、《K》はそんな「文句を書き列ね」ようがない。この段階で、《先生》の裏切りはまだ存在していないのだから。

必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。(下四十八)

《K》は、《先生》が「気が付」いたのとは異なる理由で、《お嬢さん》への言及を「わざと回避した」はずだ。

《K》は、この段階でまだ失恋していない。現在進行形で《お嬢

さん》に恋をしているのだ。だからこそ《K》は遺書を「抽象的」に書かざるを得ない。「自分は道のために全てを犠牲にして精進して生きてきたが、お嬢さんに恋をしてしまい、それを退けることができない。薄志弱行で、到底行先で道を成す望みはなく、自分もはや死以外に選ぶ道はない。」と「具体的」に書くことなどできようはずもない。自分が恋している女性に、直接的ではないにしろ自分のせいで人が自殺したなどという傷を負わせられるはずがない。だから「わざと回避した」のだ。

そういった思いで書き上げた遺書を机の上に置き、《K》は隣室で眠る《先生》の様子を窺う。襖を二尺ほど開けて、《先生》に「もう寝たのか」と声をかける。《先生》に「何か用か」と聞き返され、「大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思って、便所へ行つたついでに聞いてみただけだ」と「不断よりもかえって落ち付いていたくらい」の声で応じた。はたして《K》の自殺は、遺書だけを残して未遂に終わったのだ。

その後、自殺を執行できずにいた《K》は、不意に奥さんから、《先生》と《お嬢さん》との婚約を聞かされることになる。ここにいたって初めて《K》は《先生》の裏切りと《お嬢さん》との恋の終わりを知ることになるのだ。

さて、漱石は、なぜ上野での対決の後、《K》を死なせなかったのだろうか。ここにこそ、《K》の自殺の理由と「こころ」の最も重要なテーマがある。

上野での対決の後、《K》は自分の人生をかけた道を失っている。しかし、彼にはまだ残されていたものが二つあった。それは他でもない、《先生》と《お嬢さん》だ。

友人としての《先生》、そして、《お嬢さん》との恋の存在が、漱石が《K》に二週間の自殺の延期をさせた理由だろう。

先にも名前を挙げた柳澤浩哉氏は、《K》が最初の自殺の決意から二週間も生きていた理由を、《お嬢さん》に愛されているという錯覚に求めている。

静はKに対して思わせぶりの態度を執拗に取っている。静の思わせぶりの言動をざっと列挙してみよう。まず、彼女は先生の留守を狙うようにしてKの部屋をしばしば訪問する。そして、い出したとは考えられないから、これは静から誘ったのデパートに違いない。さらに、正月のカルタでは露骨にKを鼻根にして先生を嫉妬で狂わせる。また、嫉妬で動揺している先生に、静はしばしば嘲笑するような笑いと言葉を浴びせている。これらの静の言動が、ウブなKにはどう見えただろう。静が自分に恋していると信じたとしても不思議はない。Kの気持ちには分からない部分もあるが、自分が静に愛されていると思いつていたこと、そして、この思い込みのために恋心を抑えられなかったことは間違いないと思う。<sup>(2)</sup>

《お嬢さん》と同年代のある女子高校生は、《先生》に対するあてつけとして《K》が《お嬢さん》に弄ばれているということを手簡単

に看破した。《お嬢さん》に対する彼女の評価は手厳しい。しかし、ウブな当事者《K》はそれに気付けたであろうか。もし仮に、《K》が、《お嬢さん》への恋ではなく、《お嬢さん》との恋という認識であったとき、奥さんから聞かされた二人の婚約は、彼に残された、唯一つだけの「他者と繋がっている」という感覚を奪い去り、完全に孤独に陥れることになる。

再び、《K》が二人の婚約を知った部分を引用してみる。

奥さんのいうところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口いっただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「おめでとうございませう」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事ができません」といったそうです。(下四十九)

友人と思っていた《先生》は、自分を愛していると思っていた《お嬢さん》は錯覚で、そんなものは存在しなかったと諒解してしまい、ただ一口「そうですか」とだけやっと絞り出した《K》の心情はいかばかりか。

「結婚はいつですか」その言葉の裏には、「それまでには必ず」と

という思いが貼りついていたにちがいない。

「二日余り」たつて、《K》は自殺する。用意していた遺書に、「もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句」を書き加えて。

もし、あの上野の対決の晩に死ぬことができなければ、いや、その後であっても、二人の婚約を知らされる前に死ぬことができなければ、こんな残酷な現実を知らずに済んだのに。そんな切実で正直な思いを書き加えて、《K》は自殺したのだ。

《K》は、養家からも実家からも関係を絶たれて繋がりは無い。彼を支えていた精進の道は失われてしまった。それはすなわち、丹念に紡いできたこれまでの自分との断絶を意味する。

しかし、その時点で漱石は《K》に自殺を執行させなかった。《K》の所有した全ての繋がりを絶ち、完全な孤独を突きつけて自殺させた。

「こころ」の大きなテーマの一つはおそらく、「孤独は人を殺す」。

### 三

孤独がもう一人の男を殺す。《先生》の孤独を《K》との同一性の観点で確認したい。

《先生》は、まだ「二十歳にならない時分に」両親を病で亡くし、その後世話になった叔父に「財産を誤魔化され」、一切の関係を絶っていた。《K》と同様、血縁という点ではすでに天涯孤独である。

《K》を死に追いやったという罪悪感とは、「許しがたい不徳義漢」であり「人間というものを、一般に憎むことを覚え」させた叔父との同一性を《先生》に芽生えさせる。「自分もあの叔父と同じ人間だと意識」することで、それまでであった「己は立派な人間だ」という信念は「美事に破壊され」て、《先生》は自分自身に「愛想を尽かすことになる。

「ほとんど世間と交渉のない孤独」な先生にとって唯一の繋がりにある妻となった《静》は、自らの罪の証である。《先生》自身が「この幸福が最後に私を悲しい運命に連れていく導火線ではなからうかと思」った通り、それは彼の徹底的な孤独の始まりであった。

私は妻と顔を合せているうちに、卒然<sup>そつぜん</sup>Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私をどこまでも結び付けて離さないようにするので。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうかとかいう詰問を受けました。笑って済ませる時はそれで差支えないのですが、時によると、妻の痛も高じて来ます。しまいは「あなたは私を嫌っていらっしやるんでしょ」とか、「何でも私に隠していらっしやる事があるに違いない」とかいう怨言も聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。(下五十二)

《静》を「嫌っていい」るわけではなく、むしろ愛しているがゆえ

に「隠してい」る自らの罪を、《先生》はその妻によって日常的に突きつけられてしまう。《先生》の苦悩の日々が、《静》を遠ざける。

徐々に、しかし確かに孤独に苛まれていく《先生》は、「酒に魂を浸して、己を忘れようと試み」たり、あるいは「書物を読」んでみたりするが、結局のところ自らの孤独を実感していく階段を上っているに過ぎない。《先生》の徹底的な孤独の自覚が、《K》との共感に辿り着かせる。

私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寥でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありません。私が、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向つてみると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしまいにKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなつた結果、急に所決

したのではなからうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横通り始めたからです。(下五十二)

教科書には載っていない《先生》のこの認識が、すべてを物語っているように思う。《K》は孤独ゆえに自殺した。そして《先生》もまた、孤独ゆえに自殺する。

《K》は、どうすれば自殺せずに済んだのだろう。  
《先生》は、どうしていれば生きていられたのだろう。

生徒に投げかける最後の問いである。

少なくとも《先生》は、「世の中で自分が最も信愛している」《静》が「自分を理解していない」ことを「悲し」み、「寂寥」を感じている。「理解させる手段があり」、「理解させる勇気」さえ持てば、《先生》は「どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような」孤独から逃れられるのだ。《先生》は、生きられる。

私は一層思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしいざという間際になると自分以外の力が不意に来て私を抑え付けるのです。(中略)その時分の私は妻に対して己れを飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺悔の言

葉を並べたなら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれ  
たに違いないのです。それをあえてしない私に利害の打算があ  
るはずはありません。私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印する  
に忍びなかったから打ち明けなかったのです。純白なものに一  
雫の印気イヅキでも容赦なく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛  
だったのだと解釈して下さい。(下五十二)

《先生》は、「ありのままを妻に打ち明け」れば、「妻は嬉し涙を  
こぼして私の罪を許してくれ」る確信があり、それによって自分  
身も救われると認識しながらも、「純白」な「妻の記憶に暗黒な一  
点を印するに忍びなかった」と語る。

《K》の自殺の折、《お嬢さん》に「昨夜のものすごいありさまを  
見せずにすんでまだよかった」と感じ、「若い美しい人に恐ろしい  
ものを見せると、せっかくの美しさが、そのために破壊されそうで  
こわかった」と考えている《先生》にとって、また、恋を「神聖な  
もので」とありとし、「世の中で女というものをたった一人しか知ら  
ず」「妻以外の女はほとんど女として私に訴えない」《先生》にとっ  
ては、《静》は「汚してはならない守るべき無垢な存在」なのである。  
《先生》にとって《静》は、誰かが、まして自ら変質させてよい  
存在ではなく大切に「保存」しておく対象なのだ。そのまなざしは  
一方的で、ともすると「守る／守られる」という垂直的な関係を強  
いる。

「隠し通して一人で死んで、一人残されるくらいなら話して欲しい」

「《静》の『幸福』のことを考えているようで考えてあげてない」  
「そもそもそんなに純白じゃない」

《静》の「純白」を守ろうとする《先生》に、現代の女子高校生  
はやはり手厳しい。《静》、女性の立場からすると、勝手に「純白」  
で「汚してはならない」存在と決め付けられ、理由も分からず遠ざ  
けられ、不安と寂しさの中で結婚生活を送り、挙句の果てには「自  
殺」してたった一人残される側からすれば、それが「幸福」である  
はずがない、そういうことだろう。

《先生》は、「《静》の純白を守ったまま自殺すること」と「あり  
のままを語って《静》の純白を汚し、自分自身を救う」とを比べた  
とき、どうしても後者を選択できなかった。そこには、自分自身  
を、「近づくほどの価値のないもの」として「軽蔑し」続け、「死ん  
だつもりで生きて行こうと決心」しても「恐ろしい力」が「お前は  
何をする資格もない男だと抑え付け」てくる無価値な存在として、  
許されざる罪人として自覚する強い自己否定がまわり続けたのだ  
らう。

波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常に  
ここうした苦しい戦争があったものと思っして下さい。妻が見て  
菌痒はがゆがる前に、私自身が何層倍菌痒はがゆい思いを重ねて来たか知れ  
ないくらいです。私がこの牢屋の中に凝じとしていた事がどうし  
てもできなくなった時、またその牢屋をどうしても突き破る事  
ができなくなった時、必竟私にとって一番楽な努力で遂行でき

るものは自殺より外にないと私は感ずるようになったのです。  
(下五十五)

もし《先生》が、《静》の場所に立ち、《静》の孤独とそこから眺める《先生》自身の価値を認めることができたならば、自分の知っている「自分の無価値」ではなく、《静》にとつての「《先生》の存在価値」を信じてあげることができれば、「ありのままを語って《静》の純白を汚すことは、実は《静》自身を孤独から救うことにもなる」というひとつの認識を素直に飲み込むことができたのではないだろうか。

《静》に「こうあって欲しい」という願望、あるいは《静》は「こうである」という思い込みは、まぶしい「純白」となって《静》自身の姿を覆い隠し、彼女が一人の主體的な人格を持っているという事実には届かない。

《静》に「ありのまま」を話せば、傷つけたかもしれない。しかし、そこで彼女がどのような思いを抱え、どのような言葉を返すのかは《静》自身の問題である。《先生》には、《静》に「苦しむ自己の全体」を投げかけ、《静》自身の声を受け取り、自らと二人の関係を変質させていくという選択もありえたはずだ。

しかし《先生》は、一人の主体としての《静》と、その《静》が求める《先生》自身の価値を信じて自ら言葉を発し、《静》を「変質」させる勇気を持つことはできなかった。かくして、その垂直的な関係は、互いが横に並んで影響しあうという、水平で双方向的な「繋がり」に変質しなかった。

それは、新たな「関係」を結べない《先生》が明治の精神に殉じ、

次の時代に足を踏み入れなかったことを暗示するようにも思う。

#### 四

生きるとは、他者に触れ、変質していくことに他ならない。我々は誰かに働きかけ、働きかけられ、傷つき、傷つけ、お互いに変質を繰り返しながら繋がっていく。変質するがゆえに他者と繋がることができる。自分の価値は自分だけではなく、むしろ他者が認めるものだ。

《K》にしろ《先生》にしろ、他者と変質を拒む。自らのあり方・生き方を価値として、あるいはそれに囚われて変質しない二人には、同質の「閉鎖性」がある。不安に立ち止まり、未来へ前進しない。

変質を恐れ他者との交流を絶った孤独こそが、生きることの難しくするのもかもしれない。

《K》は、完全な孤独に陥って自殺した。

《先生》も、孤独から逃れられずに自殺した。

それにしても、「私だけがなくなった後の妻を想像してみるといかにも不憫」に思い、何度も自殺を思いとどまった《先生》は、《静》を残して、なぜ自殺できたのだろうか。

《静》は、父親を戦争で、母親を病で亡くしている。

《K》や《先生》と同様、血縁という点ではすでに天涯孤独である。

そして今、夫を失った。小森陽一氏<sup>③</sup>が指摘したように、「世

の中で頼りにする』たった『一人』の人を失った』《静》は「孤独」のただ中にある。さらに、『先生』と《静》は、次のようなやり取りをしている。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終ったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白あからさまに妻にそっくりいきました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死でもしたらよからうと調戯からかいました。(下五十五)

これを受けて《先生》は、「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだ」と答えた。

《先生》は、自分が自殺したとき、《静》がこの「殉死でもしたらよからう」という言葉を放ったことを思い出す可能性を考えなかったのだろうか。もし、夫の自殺を後押ししてしまったと、自分が夫を殺したと考えてしまったとしたら、その瞬間、《静》は、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という言葉を放ち、《K》を裏切ることによって死に追いやった」自分と同じ罪悪感と苦悩と孤独をそのまま味わうことになる、そう考えなかったのだろうか。

少なくとも、『先生』には《静》が「孤独」に苛まれ続けることはないという確信があったはずだ。この「孤独」の連鎖を断ち切る者は一人である。

「あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えをむやみに人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」

「別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足はできないのです」

先生はあきれたといった風に、私の顔を見た。巻煙草を持っていたその手が少し顫えた。

「あなたは大胆だ」

「ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」

「私の過去を許ゆるしてもですか」

許くという言葉が、突然恐ろしい響きをもって、私の耳を打った。私は今私の前に坐っているのが、一人の罪人であって、不断から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼かった。

「あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるようだ。私は死ぬ前にたった一

人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたははらの底から真面目ですか」

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いった事も真面目です」(上三十二)

私はその時心のうちで、はじめてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、ある生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭であつた。それで他日を約して、あなたの要求を斥けてしまった。私は今自分で自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。(下二)

「不安に動かされるたびに、もっと前へ進みたくな」り、「もっと前へ進めば、私の予期するものが、いつか目の前に満足に現われてくるだろうと思つている《私》は、《先生》に「無遠慮に」触れ、「温かく流れる血潮を啜」つて変質し、《先生》と「その過去が、生み出した思想」に価値を認めるものだ。《先生》は自分の死後、ただひとり信じた《私》が《静》と「繋がる」ことを信じていたのではないか。

私は妻にはなんにも知らせたくないのです。妻が己の過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが

私の唯一の希望なので、私が死んだあとでも、妻が生きている以上は、あなたかぎりに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしておいてください。(下五十六)

先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとつて見惨なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。(上十二)

飛び乗った汽車の中で《先生》の「遺書」に触れて「新しい命が宿つた《私》は、《先生》の「遺書」とともに、新たな時代と関係を生きる。

#### 引用文献及び参考文献

- ・石原千秋「『ころ』 大人になれなかった先生」(みずす書房 2005)
- ・柳澤浩哉「Kはなぜ自殺したのか―『ころ』の謎を解く―」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部57号 2008)
- ・小森陽一「『ころ』を生成する『心臓』」(『成城国文学』1号 1985)
- ・中広全延「『K』はなぜ自殺したのか? ―夏目漱石の小説『ころ』に関する精神医学的解釈の試み」(夙川学院短期大学紀要第39号 2010)

※「ころ」本文は集英社文庫(2008)によった。

(ふるかわ・よしろう)